

もど子と人婦

號拾第卷五第

もど子

金次のはなし

やまとの翁

さても、ある處に金兵衛といふ  
一人の農夫がありました。ある  
日の夕暮、いつもの様に畑を仕  
舞うて、家に歸らうとしますと、  
何處かで、しきりと赤坊の泣き

聲がする、はてなと思つて、其聲を目宛に探して見た所が、生れてやつと一月経つたか經たぬ位の、可愛い男の赤坊が、畑道の草の中に、一人法師で置かれた儘聲を限りに泣いて居るのであります。金兵衛爺さんは、

「やれく可愛相に、何處の誰が捨てたのか知らぬが、こんな可愛い男の子を捨てるとは、まあよくくの事情があるのであらう、どれく抱いて上げよう」

といつて抱き上げて見ると、まるく肥りこんで、丸で昔話にある金太郎を見る様、

さて、家へ抱いて歸つて、幸ひ子供がなくなつて、一人欲しい欲しいと思つて居た所でしたから、いっそのことこの捨子を自分の子

にして育てゝ見  
 ようといふので、  
 金次と名を付け  
 て、大事に大事  
 に育てゝ居まし  
 た、  
 月日の経つのは、  
 早いもので、金  
 次はもう十四歳  
 の少年になりま  
 したが、先づ見



た所で、普通の  
 人の二十五六の  
 身体とも見えま  
 す、夫に力の強  
 い事と來ました  
 ら、この上もな  
 い位で、十抱も  
 ある檜の大木を  
 根こぎに引き抜  
 くことなどは、  
 丸で草でもむし

る様な風でしたから、金兵衛爺さんの喜びは、大したものので、毎  
 日明けても暮れても、金次、金次といつては可愛がって居ります  
 と、金次も、たった一人のお老爺さんを、大切に孝行を盡し  
 て居りましたが、其中に、金兵衛爺さんは、風を引いたといふの  
 が元で、金次がさまざま心を盡して介抱しました甲斐もなく、そ  
 んなりとうく目を眠って仕舞ひました。  
 一時は金次も、甚く悲しみましたけれども、死になられたからは、  
 もう仕方がないと諦めて、さて、これからどうしたものかと考へて  
 居ましたが、こうして農夫などして居てもつまらないから、今か  
 ら諸國を廻って、何か面白い仕事を見付けて来ようといふので、  
 ある日のこと、一人でふいと出かけました。

夫がら金次は、方々と廻り歩いて見ましたが、一向吃驚する程のことにも出遭ひませんでした、所がある日の事、大きな森の中を通つて見まして、さすがの金次も驚きました。と申すものは、雲つく程の一人の大男が居て、二抱も三抱もあり相な大木を、丸で小枝でも折る様な調子で片端からほきくとへし折つて居たのです。金次は、なる程こいつはえらい力持だと思つて暫らく眺めて居ましたが、やがて其男の側に行つて、

「やあ、兄弟、大變な力じゃな」

といひますと、其男は仕事を已めて、宛然笑ひながら、

「なあに駄目ですわ、私は木樵の力三といふもんですが、實は、近頃名高い金次といふ男と、一番力較べをして見たいと思つて、

夫それで毎日まいにちこうしてやっつて居ゐるんですよ」

といふ、夫それを聞きいて金次きんじも宛然にっし笑わらつて、

「そりやお易やすいこつた、貴様きさまの尋ねたづねてる金次きんじといふのは、こゝに

居ゐる己おれのことだ、夫それじゃ力三りきぞう、何方どつちが強つよいか、此處こゝで相撲すもうを取とつ

て見みよう」

力三りきぞうも少しは驚おどろいたが、名告なりかけられては仕方しかたがない、夫それでは

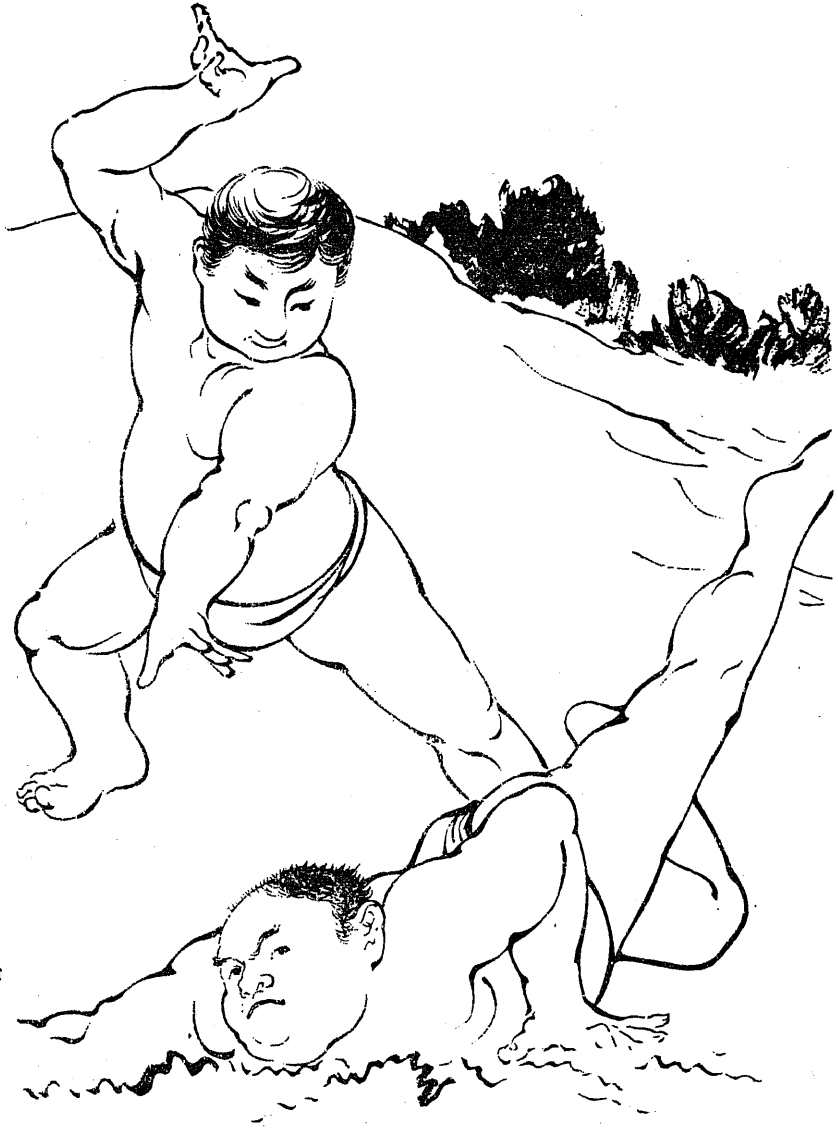
といふので、四股履しこふみみならして、二人ふたりは、うんと取りとりくんだが、

何なんの事ことはない、金次きんじは、力三りきぞうの腕うでを取とつて脊負しよひ投なげで以もつて、二三

間けんも向むかふに投なげ飛とばすと、其拍子そのひょうしに、力三りきぞうの身からだ體たいは、どしんと音おと

がして膝ひざの所ところまで、地面ぢめんに食くひ込こんで仕舞しまひました。さあどうだ

といふと、力三りきぞうはやつとの事ことで、足あしを地面ぢめんから拔ぬき出だして、夫それで



はもう一番といふので、又取りくんだが、こんどは、力三りきぞうが、金次きんじの次を頭の上うへにさし上げて、やっといつて、投げ下ろすと、金次きんじの身體からだは、大方腰こしの所ところまで地面ぢめんに食くひ込みました。さあ、今度こんどはいよく三番勝負さんばんしょうぶといふので、二人ふたりとも念入ねんいりに仕切しきって取り組みました。が、とうく力三りきぞうは丁度首ちやうどくびの處ところまで、地面ぢめんの中に投なげこまれました。そこで力三りきぞうは、いよく恐れ入おそって、早速さつそく其場そのばで金次きんじの手下てしたになるといふ約束やくそくをしました。

そこで、金次きんじは力三りきぞうを供ともにつれて、山道やまぢを二人ふたりでやっつて参まゐります。と、今度こんどは一人ひとりの男おとこが、拳固けんこで以もつて、大きな石いしを粉微塵こなみじんに碎くだいて居まります。金次きんじは、其側そのそばに行いつて、

「や、拳固けんこで石いしを割わるとは中々なかなかの強力きやうりきだね」



といつて見ました所が、其男は振り返つて、

「はあ、私は石割りの鎚九郎といふ者ですが、私の一生の希望と申すは他でもない、今世の中に聞えて居る金次といふ若者に遭つて、一番力較べをして勝つて見たいといふ事なのですよ」

うん、夫なら譯やない、己が其金次といふ者だ。夫では直此處で相撲を取つて見よう」

といふので、又二人の間に相撲が始まりましたが、どうして、とても金次に勝つことは出来ない。鎚九郎も、とうく金次の手下にして貰ひました。

夫から、金次はこの二人を引き連れてやつて参りますと、又一人の男が、丸で餌の棒かなんぞを捻る様な調子に、太い鐵の棒を、

自由に捻廻はして居ます。金次はこれを見て、さてく此奴も恐ろしい方のある奴だなと思ひながら、側に寄って、

「見た所では、お前さん中々の力の様だね」

と言ひますと、其男は、

「へい、私は金物師の鐵五郎といふものですが、どうかして、金次といふ者に出遭つて、勝負したいと思つて居るのですよ」

といふ、金次は、

「うん、其金次とは己の事だ、さあ直勝負しよう」

といつて、又二人でやり合つて見ましたが、中々金次に叶はないので、これもこゝで手下になつて、とうく四人連れになつて、此處を出かけました。

夫から、暫く行つて、ある森の中に着いた所で、金次は木樵の力三に向つて、

「さて力三、己は鎚九郎と鐵五郎とを連れて、これから一息狩りに出かけるから、貴様後に残つて居て、食事の用意をして置くがよろし」

と言ひ付けて置いて、金次は二人を引き連れて出かけて行きました。そこで力三は後に残つて、言ひ付けられた通り御馳走の用意をして居ますと、其處へ偶然と、小さな小人が顯はれて来て、

「お前さん何を料理して居る？どうか私にも少し喰べさせてくれないか」

と言ひますから、力三は「ふーん」と鼻であしらつて、

「誰が貴様の様な者に呉れるものか、一昨日お出でだ」

といつて、素知らぬ顔して、せつせとお晝の用意をして居ります、

小人は、

「くれないなら、こうして貰ふのだ」

といふかと思ふと、つと寄つて来て、大きな男を引つかついたと思ふといきなり地面の上に投げつけて置いて、そこに在つたお料理を残らず喰べて仕舞つて、其儘消えて仕舞ひました。力三はやつと起き上つて見ると、折角造らへたお料理は皆喰べられて居ます、其中に出て行つた三人は歸つて來ました、所が晝飯の用意が何も出來て居ません、金次を始め二人の子分は、ぶんくいつて怒つて居ますが、力三は、こんな大きな身體して、小人に投げら

れたとも言へませんから、黙って何も言ひません、

さて翌日には、石割りの鎚九郎が残り番になり、其又翌日は、金物師の鐵五郎が残り番になりましたが、二日とも、例の小人がや  
つて来て、二人とも力三と同じ目に遭ひました。そこで、愈々四  
日目の朝、金次は、とうく三人に向つて、

「おい貴様たち、毎日々々、あんな風に晝飯が出来て居ないとい  
ふのは、餘程變でないか、今日はいよく己が残り番になるから、  
貴様たちは皆出て行って見るがよい」

といひましたので、三人は、互に金次先生と小人との勝負を評し  
合ひながら、つれ立って出て行きました。(つづく)